

### 第3節 平成30年度 吉田構内(吉田遺跡)の調査

#### 1. 福利厚生施設新営工事に伴う緊急立会調査

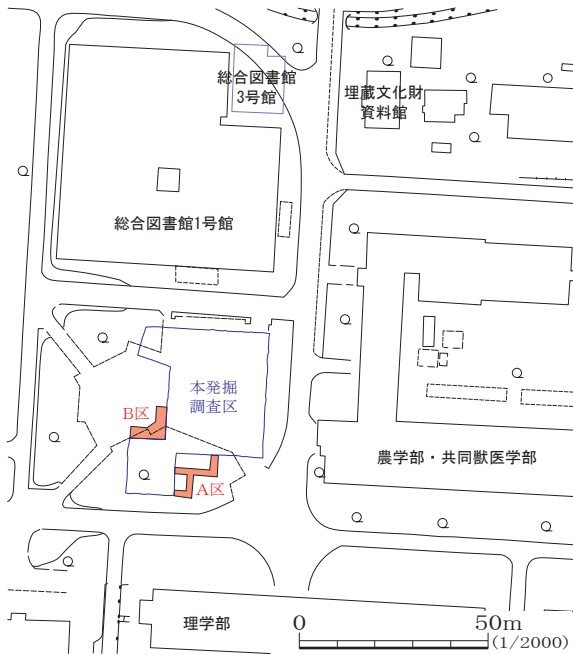


図47 調査区位置図

調査地区 吉田構内M-18区  
 調査面積 91㎡  
 調査期間 平成31年3月25・26日  
 調査担当 横山成己 水久保祥子  
 調査結果

##### (1) 調査の経緯(図47、写真214・215)

福利厚生施設新営工事に伴う本発掘調査は埋め戻しを平成30年(2018)10月25日(木)に終了し、山口大学生生活協同組合(以下「山大生協」)に敷地の引き渡しを行った。

発掘調査中のネットフェンスから工事用目隠しフェンスに付け替えられたため、平地からは工事の様子を窺うことができなくなったが、新営施設の設備関連工事立会が目前に迫った翌年3月15日(金)に、北に隣接する総合図書館1号館3階南側テラスから工事地内の状況を確認したところ、基礎杭と地中梁の配置(形状)が本発掘調査区の形状と異なることに気づいた。直ちに施設環境部に連絡を入れ、同日中に工事現場に入り、被害状況を確認した(写真214・215)。

3月19日(火)に山大生協および開発請負業者、本学事業主体となった学生支援部、工事の助言者の立場にあり、山大生協と当館とのつなぎ役を務める施設環境部に経緯を問いただしたところ、開発図を付した文化財保護法93条提出(11月15日付)後の12月に新規建物の南西部に地中梁を追加する設計変更を行ったこと(図47)が判明した。山大生協から施設環境部および学生支援部には12月中に新たな設計図が渡されていたが、その設計図が当館には届けられることはなく、山大生協から設計変更の説明などもなかったことから、施設環境部も変更気づかなかつたとのことであった。

工事ではすでに基礎及び地中梁が設置されていたが、15日の視察で記録を残せる箇所が残存していることを確認したことから、当該地での工事を差し



写真 214 破壊状況の確認(南西から)



写真 215 破壊状況の確認(西から)

止め、緊急対応として立会調査を実施することとなった。

## (2) 調査の成果(図48、写真216～223)

ここでは、本発掘調査での南西拡張区東側破壊部をA区、北側破壊部をB区とする。

A区の破壊部は基礎及び地中梁設置部に限られており(写真216)、梁間は島状に残されていたが、梁部の掘削は遺構検出面である地山まで及んでいた(写真217)。遺構の破壊が推定されたが、すでに構造物が設置されていることから調査を断念した。

B区の基礎及び地中梁設置部も同様の状況であったが、地中梁間も掘削が行われていたことから、より破壊が深刻であった。地中梁により区画ができていたため、ここではそれぞれ北調査区、南調査区とする(図48)。工事により掘削面が荒れていたため、まず掘削面の精査を行い、破壊状況を確認することとなった(写真218)。

精査の結果、南区では、本発掘調査南西拡張区北壁の遺存を確認した。調査区外の掘削は、東側で地山直上に設けられた整地土層に止まる部分を確認したが、西側では地山が露出しており、本発掘調査SK132の延長部が上部の削平された状態で検出された(写真219・220)。

北区の削平は更に甚大で、全域で地山が削平を受けていた。検出されたのは溝1条、杭跡6箇所と少数であった(写真222・223)が、本来はさらに複数の遺構が存在した可能性がある。

開発請負業者に確認したところ、地中梁間はそのまま埋め戻すとのことであったため、遺構検出後は写真撮影を行い、本発掘調査区と合成できるように遺構平面図(1/20)を作成し(写真221)、調査を終えることとなった。

## (3) 遺跡の破壊について

今回の遺跡破壊の経緯と調査成果については、3月29日(金)に開催された第6回埋蔵文化財資料館専門委員会にて報告を行った。連絡不足や確認不足の指摘、文化財保護法を遵守すべき等の意見が出されたが、長きにわたり当開発計画に対応した担当者として、今回の破壊に関する意見を書き記しておく。

福利厚生施設新営が立案されて以降、当工事に対し本学には常にひとごと感が漂っていた。当案件に関し、本学関係部署に対応等を求めた際には、冒頭に「それは生協が(に)…」と回答されるのが常であった。そのような状況に面するたび警鐘を鳴らしたつもりであったが、最後までひとごと感を拭い去る事ができなかった。その状態こそが遺跡を破壊した主原因と断定したい。

確かに、開発者は山大生協であり、建設費用だけでなく埋蔵文化財調査費用も本学ではなく山大生協が負担するという内容での計画であったが、建設されるのはあくまでも山口大学の施設であり、だからこそ本学関連部署が動いていたはずである。埋蔵文化財調査に関しては、法律上も実態もその主体者は本学で、調査担当者は当館館員となっている。当館による発掘調査終了後の開発状況の点検が手緩かったことも含め、今回遺跡を破壊したのは紛れもなく吾々なのだ。法を遵守するだけで文化財が護れるわけではない。問われるべきは本学の文化財保護理念であり、それを具体化するよう吾々が行動できているかにある。自戒も込め、この失態を糧に漸進的にでも向上して行けるよう、今後努めていきたい。

### 【註】

- 1) 現に本学が公開している『キャンパスマスタープラン2021』(山口大学施設環境委員会)には、「寄付による整備」として「(吉田)福利厚生施設(FAVO)新営」と明記されている(89頁)。
- 2) 文化財保護法第92条の「調査主体者」は学長名が記入され、提出されている。

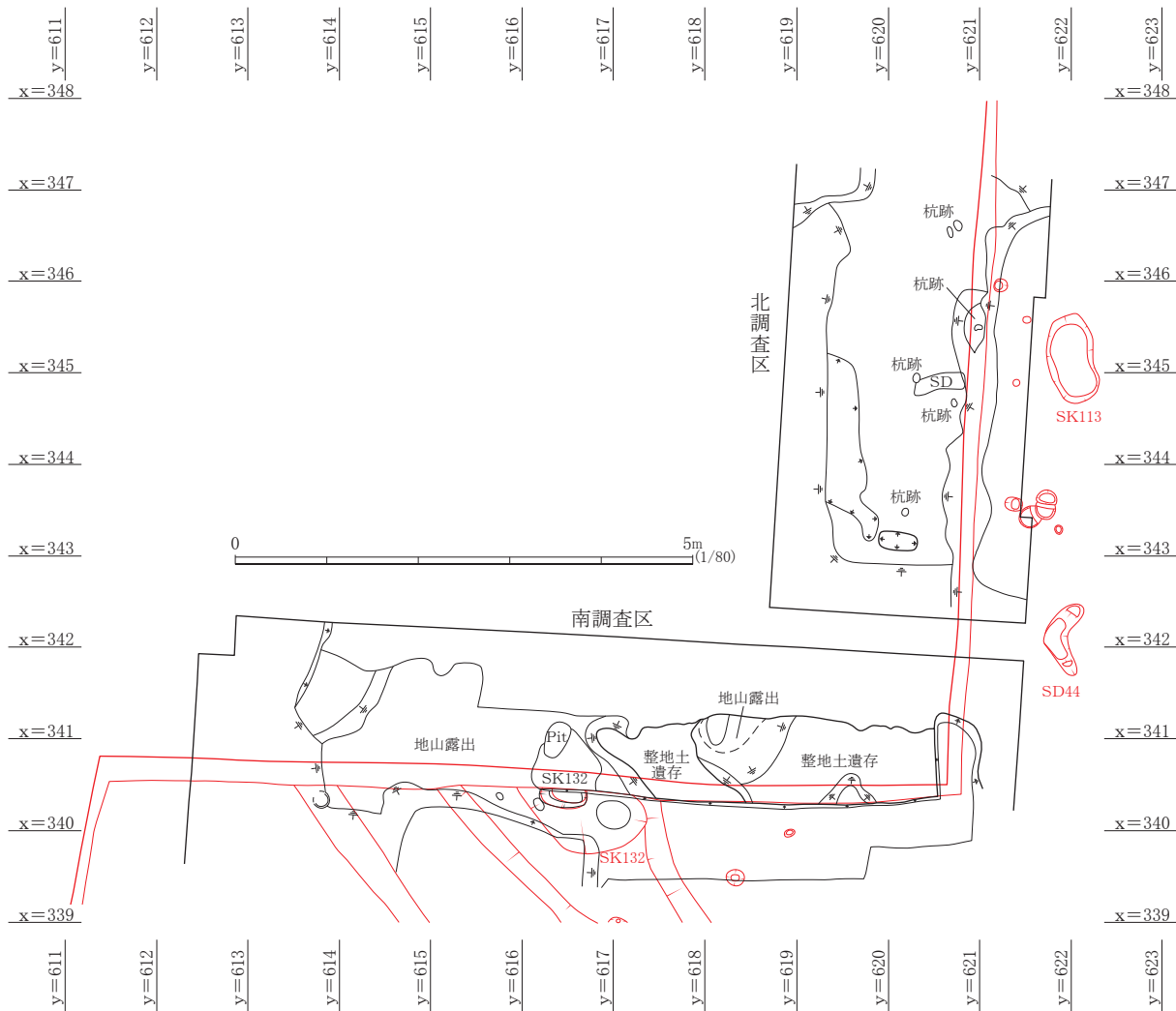


図 48 B区平面図



写真 216 A区の状態 (南西から)



写真 217 A区の工事掘削状況 (西から)



写真 218 B区南調査区作業風景 (西から)



写真 219 B区南調査区遺構検出状況 (西から)



写真 220 B区南調査区遺構検出状況 (南東から)



写真 221 B区南調査区作業風景 (南東から)

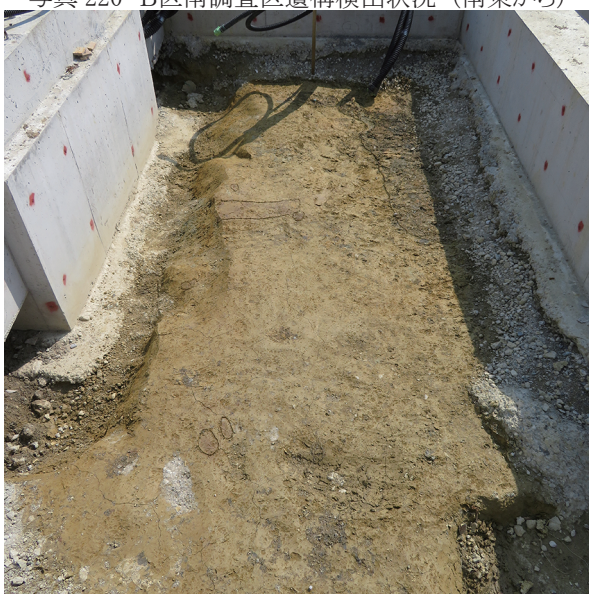


写真 222 B区北調査区遺構検出状況 (北から)



写真 223 B区北調査区遺構検出状況 (南西から)

## 2. 福利厚生施設新営工事に伴う立会調査

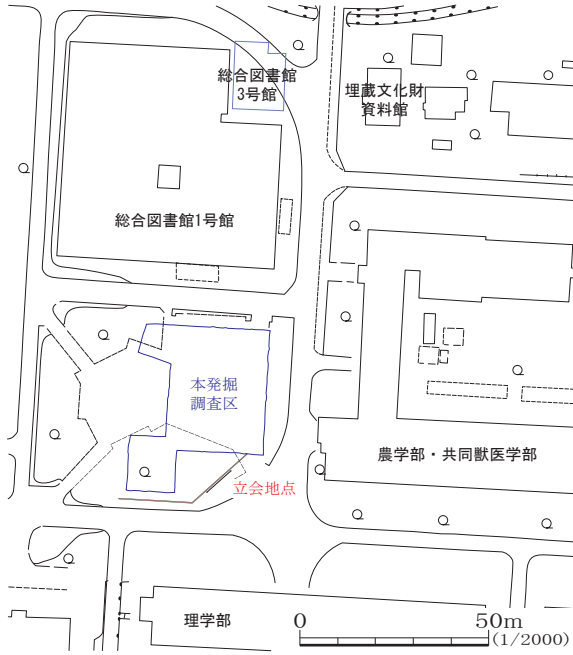


図 49 調査区位置図

調査地区 吉田構内M-18区

調査面積 20m<sup>2</sup>

調査期間 平成31年3月27日

調査担当 横山成己

### 調査結果

工事破壊に伴う緊急立会調査が終了した翌日、福利厚生施設新営に伴う設備関連工事の立会調査を実施した。調査対象とした設備関連工事は、本発掘調査区の南東部から南西拡張区への配管ルートで、約100cmの掘削が予定されていた地点である(図49、写真224)。

調査の結果、70cmの造成土の下に、層厚10cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(旧耕土)、層厚5cmの灰黄色(2.5Y6/2)シルト(旧床土)、層厚10cm以上の灰黄色(2.5Y6/2)シルトに明褐色(7.5YR5/6)シルトが混ざる(整地土)が確認され(図50、写真225)、掘削全域で整地土の下位にある地山(遺構検出面)に到達していないことを確認し、調査を終了した。

福利厚生施設新営に伴う発掘調査成果により、これまで埋蔵文化財の有無が不明確であった吉田構内中央部域にも遺構や遺物が埋存することが明らかとなった。たとえ些末な工事であっても、今後とも丁寧に立会調査を繰り返すことによって、周辺域での地下の情報を集積する必要がある。

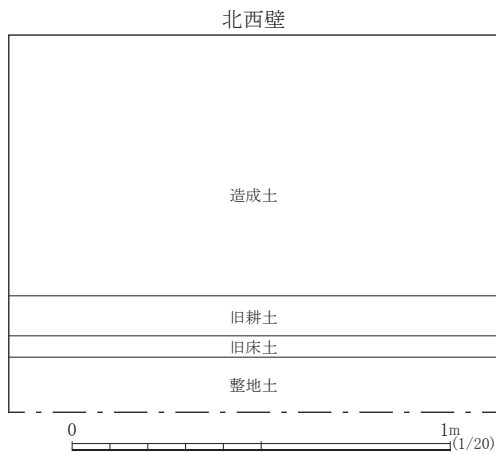


図 50 土層断面柱状図



写真 224 配管掘削ルート (北東から)



写真 225 北西壁土層断面 (南東から)

### 3. 農学部附属農場牛舎改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内T-10区

調査面積 1.35㎡

調査期間 平成31年2月5日

調査担当 横山成己

#### 調査結果

昭和41年(1966)に始まる本学吉田構地区統合移転において、最初に移転した学部は農学部であった。農学部は校舎の設置と同時に附属農場の整備も進めたが、本学が埋蔵文化財保護対応を開始する前の事業であったため、附属農場敷地に埋存したであろう多くの遺構は、消滅の憂き目に遭ったものが多かったと推定される。

当時の附属農場関連整備工事で、唯一埋蔵文化財保護対応が取られるのは、昭和41年に実施された牛舎新営に伴う発掘調査(第IV地区の調査)であった。調査では4棟の竪穴式住居跡や土壌、ピット、溝などが検出されており、調査後の略報では古墳時代後期の竪穴式住居跡と評価されたが、当館による出土資料再調査により、古代の竪穴式住居跡であることが判明した。<sup>註1</sup>

工事は既設牛舎内の改修が主体で、地下の掘削は牛舎北部の狭小範囲に限られたが、昭和41年度の調査では地表直下が遺構面であったことを重視し、立会調査を実施する運びとなった(図51)。

掘削は40cmの深度で、調査の結果、現地地表下27cmまでが表土及び造成土で、下位には暗褐色(10YR3/3)と明黄褐色(10YR6/6)のシルトが混ざり合う地山状の土層が確認された(図52、写真226)。昭和41年の発掘調査後の土地改変の状況が不明であるが、地山状土が調査区の埋め戻し土である可能性も排除できない。今後も慎重な対応が求められる。

#### 【註】

- 1) 小野忠熙(1976)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』, 山口大学吉田遺跡調査団, 山口
- 2) 横山成己(2021)「吉田遺跡第IV地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成28年度—』, 山口

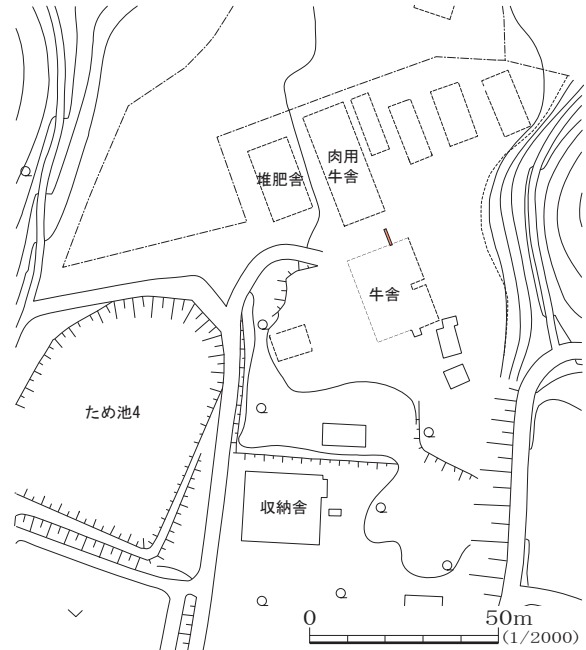


図 51 調査区位置図



写真 226 東壁土層断面(西から)

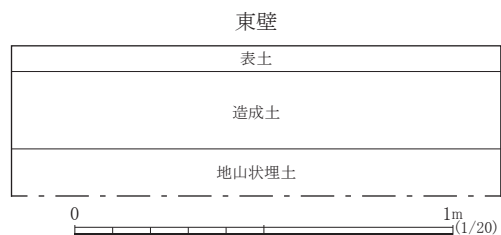


図 52 土層断面柱状図

#### 4. 経済学部身障者用カーポート設置工事に伴う立会調査



図 53 調査区位置図

調査地区 吉田構内K-21区

調査面積 3.6㎡

調査期間 平成31年2月20日

調査担当 横山成己

#### 調査結果

次年度に車椅子を使用して通学する学生が入学する予定であることから、経済学部より身障者用駐車場カーポートの設置計画が届けられた。12月14日(火)から第4回埋蔵文化財資料館専門委員会を開催(メール審議)し、埋蔵文化財保護対応として基礎工事掘削部の立会調査を実施することが承認された。

工事予定地の北西約100mには、弥生時代から古墳時代にかけての集落が営まれた微高地(遺跡保存公園)が存在しており、予定地の西に隣接する東アジア研究棟・経済学研究科棟新営に伴い実施された予備発掘調査では、調査区西側においてその微高地の延伸地が、東側において埋没河川が確認された<sup>註1</sup>。埋没河川は、造成土および旧耕土、旧床土下位の現地地表下95cmで検出されている。

基礎掘削は南北2箇所(A・B区)で行われた(図53)。A区では現地地表下60cmに旧耕土とみられる灰色(10Y4/1)シルトを確認したが、B区の掘削は造成土内に止まった(図54、写真227・228)。

#### 【註】

1) 横山成己(2013)「経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟新営工事に伴う予備発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成21年度-』, 山口



写真 227 A区北壁土層断面(南から)



写真 228 B区北壁土層断面(南から)

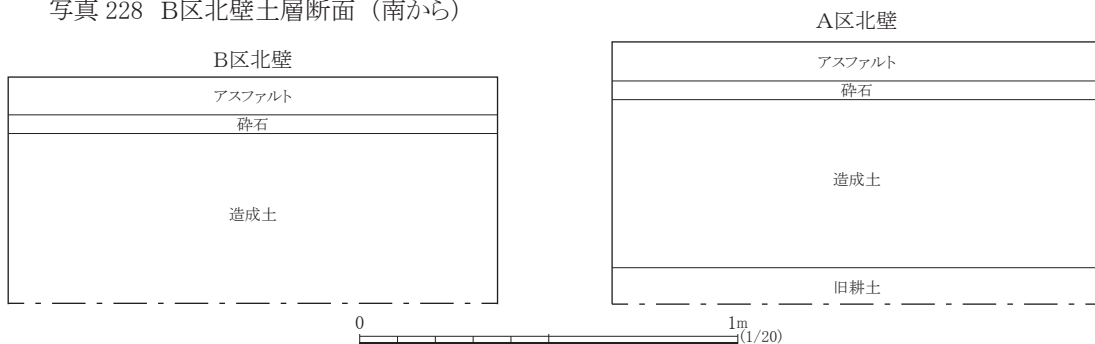


図 54 土層断面柱状図

## 5. 理学部3号館横駐輪場設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内P-18区

調査面積 64.1㎡

調査期間 平成31年3月5日

調査担当 横山成己

### 調査結果

11月に至り、理学部より理学部3号館南側に新たに駐輪場を設置する事業計画が寄せられた。駐輪場基礎部の掘削は6箇所程度で、深度は約60cmとのことであった(図55)。

理学部3号館は元来農学部の校舎として、吉田地区統合移転開始期の昭和41年(1966)に建設されたため、埋蔵文化財調査が実施されていない。東西道路を挟んで南に隣接する共同獣医学部実験動物施設は、新営時に試掘調査が実施されており、北側調査区で地表下60~90cmで地山もしくは谷(河川)埋土とみられる砂礫層を確認している。その他に周囲に目立った調査歴が存在しないことから、11月27日(火)から開催された第3回埋蔵文化財資料館専門委員会(メール審議)では立会調査が提案され、承認された。

実際の掘削は基礎設置部5箇所で行われ、いずれも造成土内に止まることが確認された(図56、写真229・230)。

吉田構内は、動物医療センター周域など地下の掘削を伴う工事計画が頻出する地域と、開発が止まる地域に二分される傾向があるが、当地域は後者に該当する。詳細な地下の情報を得るため、今後も調査を継続していきたい。

### 【註】

- 1) 河村吉行(1992)「吉田構内農学部動物舎新営に伴う試掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』, 山口



図 55 調査区位置図



写真 229 調査区全景 (東から)

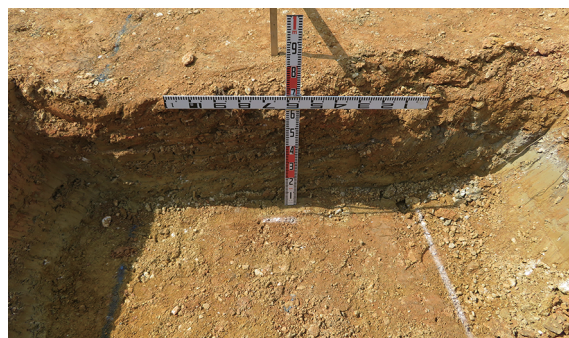


写真 230 D区北壁土層断面 (東から)

D区西壁

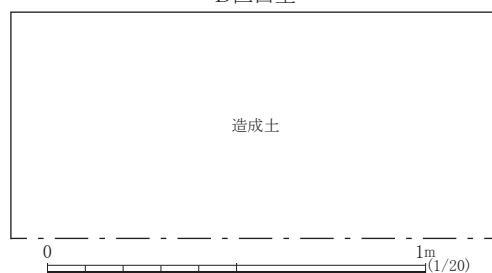


図 56 土層断面柱状図



## 6. 実験研究棟(中高温微生物研究センター)改修工事に伴う立会調査

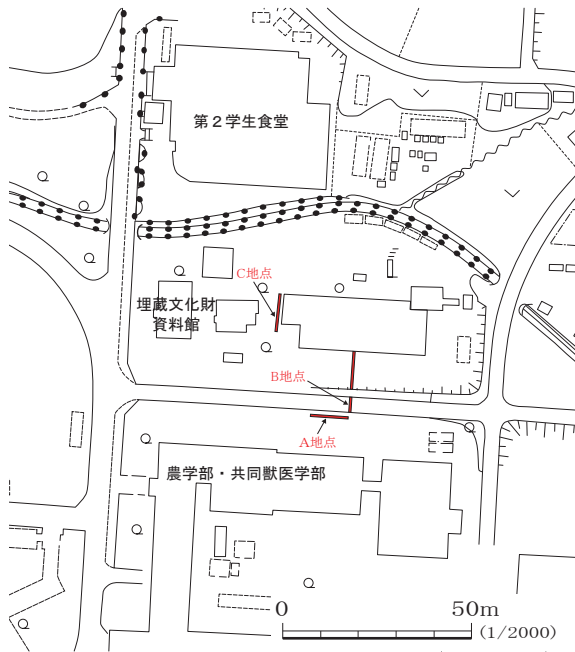


図57 調査区位置図

調査地区 吉田構内O-16区  
調査面積 21㎡  
調査期間 平成30年10月22・24日  
平成31年1月15日  
調査担当 水久保祥子  
調査結果

中高温微生物研究センターの改修工事に対し、平成29年度第7回埋蔵文化財資料館専門委員会での審議により埋蔵文化財保護対応を工事立会とすることとなり、それに基づき給排水設備の管路掘削に対して立会調査を行った。

A地点は現地地表下140cmまでの掘削で全て造成土の範囲内であった。B地点の掘削は現地地表下75cmで、アスファルト敷の裏込めの礫層(層厚約30cm)、その下層に造成土が確認された。C地点は現地地表下75cmの掘削で全て造成土であった。

なお、当調査地に近い連合獣医学科研究棟新営工事に伴う発掘調査では縄文時代の遺物を包含する河川跡が検出されており、<sup>註1</sup>今後も慎重な対応が必要である。

### 【註】

1) 豆谷和之(1994)「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XII』, 山口



写真231 A地点(北から)



写真232 B地点(南西から)



写真233 C地点(北から)

## 7. 国際総合科学部誘導サイン取設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内I-16区

調査面積 0.85㎡

調査期間 平成30年7月12日

調査担当 横山成己

### 調査結果

平成29年度末に、施設環境部より教育学部の北側に国際総合科学部の誘導サインボードを設置する計画の相談があった。国際総合科学部は、平成27年(2015)に新設された学部であるが、教育学部校舎の一部を移管したため、校舎の位置が分かりづらいとの指摘に対応するための措置であった(図58)。

予定される基礎掘削範囲は狭小であり、深度も60cmとのことであった。周域施設の設置時期が古く、埋蔵文化財調査を経ずに建設されていることから、平成29年度第7回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成30年3月26日(月)開催)にて立会調査が提案され、承認された。

工事計画地が斜面地であったことから、実際の掘削は現地表下100cmに及んだ。調査の結果、掘削範囲の大部分は表土下が造成土であったが、南東端部において現地表下60cmに層厚8cmの旧床土、下位に明黄褐色(2.5Y7/4)シルト(地山)が遺存することを確認した(図59、写真234)。

地山がなぜ大きく削平を受けているのか不明だが、比較的浅くに地山が遺存していることを確認できたことは、将来的な周辺域での開発に備える意味で貴重な成果となった。

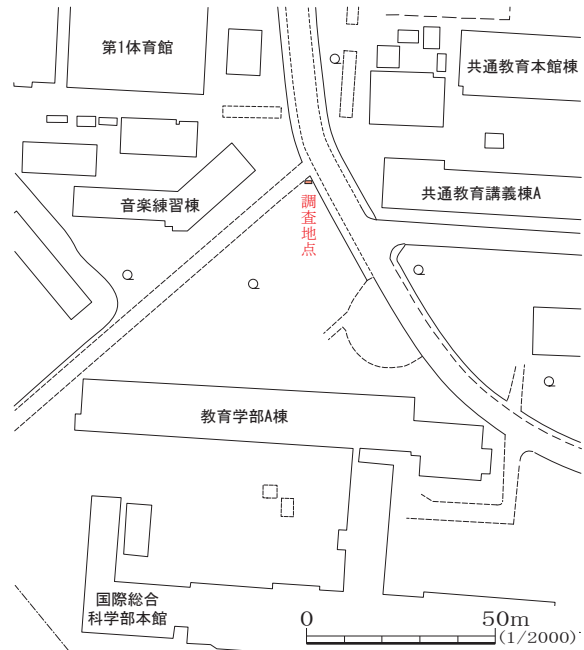


図 58 調査区位置図



写真 234 南壁土層断面 (北西から)

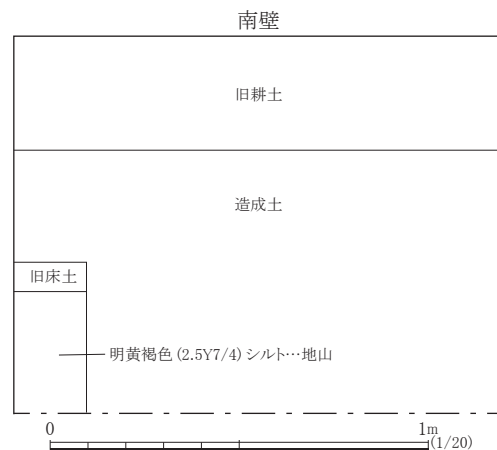


図 59 土層断面柱状図

8. 基幹・環境整備(ブロック塀対策) 工事に伴う立会調査

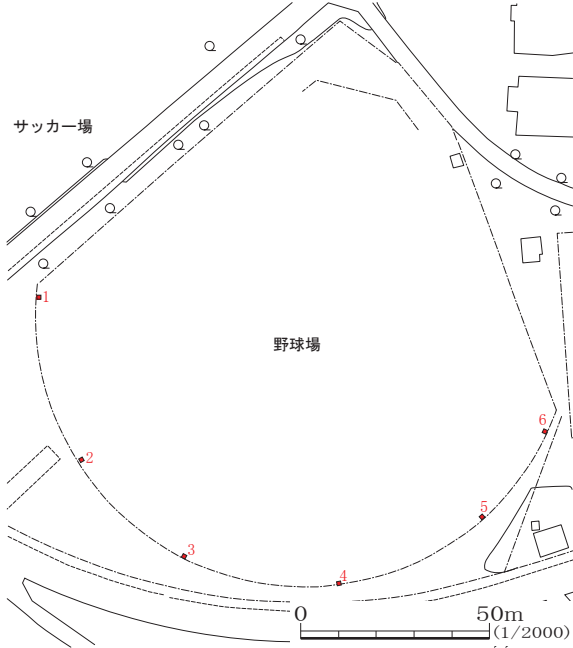


図 60 調査区位置図

調査地区 吉田構内H-22・23区 I・J-23・24区  
K-23区

調査面積 0.54㎡

調査期間 平成30年12月27日

調査担当 横山成己

調査結果

平成30年(2018)6月18日に発生し、深度6弱を観測した大阪府北部地震では、ブロック塀の倒壊により2名の犠牲者が生じたことから、全国規模でブロック塀の安全調査が実施され、基準を満たさない塀の改修工事が進めることになった。本学でも各構内で調査が進められ、順次改修工事を行うこととなったが、埋蔵文化財に支障が生じる可能性があるものは立会調査にて対応することが第2回埋蔵文化財専門委員会(11月22日(木)～開催(メール審議))で諮られ、承認された。

吉田構内野球場外野を巡る既設ブロック塀は、雨水排水溝(U字溝)に載せられた状態であったため、U字溝の手前に埋設し直す計画となった。平成21年度に実施した防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査にて外野周辺には密に遺構や遺物包含層が遺存することが確認されていたが、掘削深度が最深部で45cmと浅く、掘削の大半がU字溝の余掘に収まることが予想されることから、施設環境部及び工事請負業者の協力により、事前に6箇所を試掘を行い、地下の様相を確認することとなった(図60)。

調査の結果、第1・2・4地点では造成土内に収まっており、第3地点では表土下に層厚8cmの旧耕土、層厚5cmの旧床土、層厚10cm以上の暗灰色(2.5Y5/2)シルト(遺物包含層か)が確認され(図61、写真235)、第5・6地点は表土直下に明黄褐色(2.5Y7/4)シルト(地山)を確認した(図61、写真236)。工事業者に慎重な対応を指示し調査を終了した。

【註】

1)横山成己(2013)「野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成21年度-』, 山口



写真 235 第3地点北東壁土層断面(南西から)



写真 236 第5地点北西壁土層断面(南東から)



図 61 土層断面柱状図

### 9. 桜花爛漫植替工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内L-12区

調査面積 51.5㎡

調査期間 平成31年1月3日

調査担当 横山成己

#### 調査結果

吉田構内事務局北側の空地は、現在その大半が仮設駐車場として活用されているが「社会連携ゾーン」としてゾーニングされている。その社会連携ゾーンにはヤマザクラをはじめ数種の桜が街路樹として植えられている。これは平成22年(2010)1月から開始された「桜花爛漫～維新伝心プロジェクト～(寄付総額55,000円でネームプレートを付けた桜を植樹する)」によるものであり、目標であった植樹150本、寄付金額750万円は10年間かけて無事達成されたそうである。この地は以前農学部附属農場が実験水田として使用しており、その後平成23年(2011)開催の国民体育大会・全国障害者スポーツ大会にあわせ延伸された山口宇部道路工事で排出した花崗岩風化土(赤土)を譲り受け造成されている。土に養分が含まれているはずもなく、結果桜の植え替え工事や土の入れ替え工事を頻繁に行うこととなり、平成30年度も植え替え工事と排水溝設置工事が計画され(図62)、排水溝掘削部に対し立会調査を実施することが承認された(第2回埋蔵文化財資料館専門委員会:11月22日(木)～(メール審議))。

掘削は長さ65m、幅50cm、深さ70cmの規模で行われ、調査の結果、工事地の東側(A地点からB地点)で造成土下に水田の旧耕土を確認したが、以西は造成土内に止まった(図63、写真237・238)。

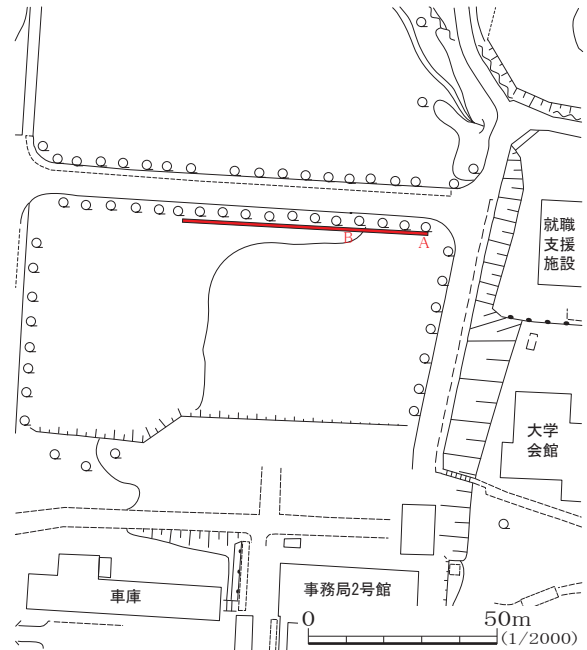


図62 調査区位置図



写真 237 桜植え替え掘削全景(東から)



写真 238 A地点南壁土層断面(北から)

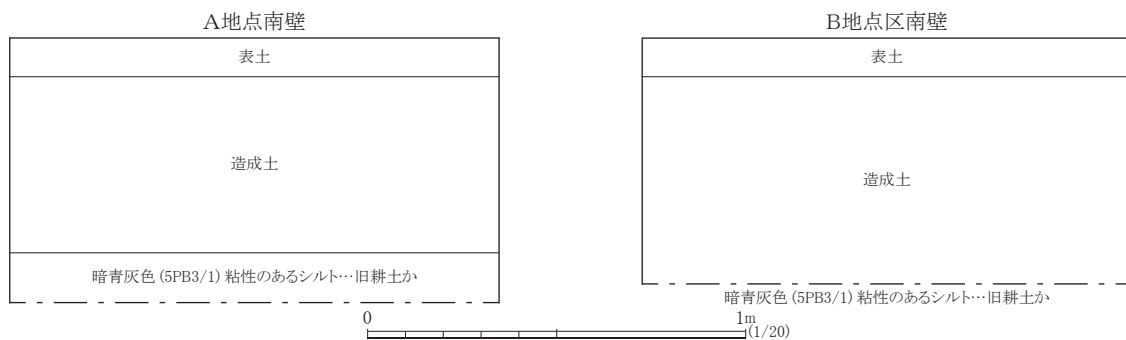


図63 土層断面柱状図

### 10. 音楽サークル棟空調設備設置工事に伴う立会調査



図 64 調査区位置図

調査地区 吉田構内G-14・15

調査面積 52.4㎡

調査期間 平成31年3月7日

調査担当 横山成己

#### 調査結果

平成30年(2018)末に至り、学生支援部より吉田構内音楽サークル棟Aに空調設備を設置するに当たり、電気容量増加のため第2体育館電気室既設ハンドホールから音楽サークル棟Aまで電源配線を埋設したいとの相談を受けた。掘削は総延長で60m、幅60cm、深度は50cmとのことであった(図64)。音楽サークル棟A東側で実施した立会調査<sup>註1</sup>成果により、工事計画地の北端部では現地地表下1mまで造成土であることが判明していたが、周辺に建つ文化サークル棟A(昭和42年(1967)竣工)、第1武道場(昭和44年(1969)竣工)がいずれも埋蔵文化財調査を経ず建設されたため、以南の地下の様相が不明確であった。第4回埋蔵文化財資料館専門委員会(12月14日(金)～(メール審議))にて埋蔵文化保護対応が諮られ、立会調査を実施することが承認された。

調査の結果、掘削はいずれも造成土内に止まることが確認された(図65、写真239)。

#### 【註】

- 1) 田畑直彦(2005)「基幹環境整備(外灯新設)工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成15年度-』, 山口



写真 239 調査地点西壁土層断面(東から)

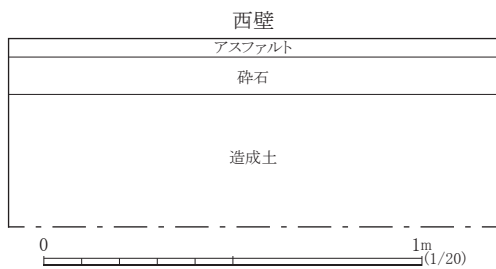


図 65 土層断面柱状図